The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂に寄与した尼崎屋一族
Author(s)	肥田, 晧三
Citation	懐徳. 1985, 54, p. 45-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90646
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂に寄与した尼崎屋一族

肥田　晧三

昨年の第一回懐徳忌に参列させて頂き、石浜恒夫先生の御講話を拝聴いたしました。すばらしい内容のお話で、じつに感銘深く承りました。つい先日発行になりました「懐徳」に、講演速記が載ってございますので、御覧下さっていることと存じます。第二回目の本日、思いがけずも私に用命を被りました。たいへん僭越でございますけれども、話をさせて頂きます。

懐徳堂が、大坂町人の創立した学校であることは、今さら申し上げるまでもありません。三星屋、舟橋屋、備前屋、道明寺屋、鴻池屋、この五人の人たちが、学校を創る相談をして、三宅石庵先生を迎えて、享保九年に尼崎町一丁目、今の今橋四丁目に、学校を創建致しました。この五人の人たちの事につきましては、西村時彦先生の「懐徳堂考」に「五同志列伝」の項目を設けて、その功績を書いて下さっております。五同志の懐徳堂への貢献の尊いことは、もとより申すまでもありません。が、同じく懐徳堂に学び、学校の維持費をも負担し、学校の経営に寄与した学問の好きな大阪の人たちは、この五人の人々以外にもまだまだ沢山おられました。五同志の盛名が余りに大きいために、その陰に隠れて、そうした人たちのことがほとんど埋もれてしまっているということもあると思うのであります。尼崎屋市右衛門と尼崎屋七右衛門、これは大阪梶木町一丁目、現在の東区北浜五丁目ですが、そこで醤油醸造を家業としておられた大阪の旧家ですけれども、この尼崎屋一族が、懐徳堂のために大へん力を尽されましたことが、従来全く埋もれております。今日はそのことをお聞き願いたいと思います。話が考証めいたことで、たいへん堅苦しゅうござい

ますけれども、暫くの間、御静聴をお願い申し上げます。

私が尼崎屋というものを知りました動機、順序としてそのことをまず申し上げます。今から二十年前、昭和四十年のことであります。私は阪急沿線の池田に住んでおりますけれども、池田の旧家福原喜継さんのお家に、古い屏風を御所蔵で、それを一度見てほしいとのことで、郷土史家の長老林田良平先生のお伴をしてまいりました。福原家は代々樽屋喜兵衛と申され、池田酒の樽を作るお家ですが、現在はもう、樽の仕事はしておられません。そこへ参って屏風を拝見致しました。その屏風は、洞庭湖図の六曲一双で、福原五岳の作品でございます。これがじつに驚くようなすばらしい作品でございました。福原五岳は、池大雅について絵を学び、後に大阪に下って、大阪文人画の基礎を拓いた、たいへん優れた画家であります。その福原五岳が、洞庭湖を取材致しましたところの、実に大作でございます。その色彩の絢爛、その構図の配置の妙、雄大にしてしかもすばらしいできばえに、一見、立ち竦む思いが致しました。杜甫が洞庭湖を詠じました有名な詩の一節に「乾坤日夜浮かぶ」とありますけれども、まさしくその感じが、見る者に迫ってまいります。屏風の片隅に落款がございまして、「安永元年、楽聖草堂に於いてこれを画く、福元素」としてあります。福元素は福原五岳のこと、楽聖草堂は五岳の書斎名です。安永元年（一七七二）と製作年代がはっきりわかります。今からちょうど二百年前になります。屏風のできばえのすばらしいのに驚きましたけれども、同時に驚きましたことは、この屏風の上部に、当時の大阪の著名な文人十四人の賛があることでした。その文人と申しますのは、中井竹山先生、三宅春楼先生、中井履軒先生、それから中村両峰、早野仰斎、以上は懐徳堂関係の人々。それから片山北海、葛子琴、頼春水、細合半斎、田中鳴門、鳥山菘岳等の、片山北海を盟主とするところの混沌社の人たち。当時の大阪を代表する学者文人たちが、それぞれ洞庭湖を詠じた詩を、屏風の上欄に賛している。福原五岳の絵がすばらしい上に、さらに加えて十四人の名家の賛が揃っている。まさしく、大阪文芸史の第一級の資料というをはばかりません。一昨年、大阪市立美術館が編纂しました「近世大坂画壇」という図録に、この屏風の写真が入っていますので、その本をさげてきました（本を示す）。写真が小そうございますので、本を広げましても、ほとんどおわかりにくいと思いますけれども、だいたいの屏風の構図が、これでおわか

り頂けると思います。

なぜこの屏風が福原家にあるかといいますと、池田に荒木李谿という文人がいました。ちょうど安永天明時代、この絵のできました時代の人ですが、鍵屋という家業は造り酒屋をしており、家が豊かで、親の代以来、文芸の趣味に優れて、李谿もまた大阪の懐徳堂に学んだ人であります。その家にこの屏風があって、福原さんのお家は、李谿の家が断えましたとき、身寄りのなくなった荒木家の一人娘を引取ってお世話なさった。そういう因縁で、屏風を福原家で継承しておられるとのことでした。大へん幸いなことに、林田良平先生のお家に、やはり、荒木李谿の自筆詩稿一束が伝っていまして、その遺稿の中から、この屏風のできあがりましたときの事情を書いた紙片が同時に見付かりました。それには次ぎのようなことが書いてありました。「この洞庭湖屏風は、私（李谿）の弟の茂が、師匠の福原五岳に依頼して書いてもらったものであるが、弟の茂は、この屏風に、兄さんの友達の大阪の漢詩文の先生方に、洞庭湖の詩の賛をもらってほしいと頼んできた。そこで私は、自分の師友である、懐徳堂の先生方、あるいは混沌社の先生方に、洞庭湖の詩を作って下さることをお願いして、安永三年、（この屏風ができてから二年後ですが）、初夏の一日に、大阪北野の金氏の別業に諸先生を招待して、この屏風を広げて、先生方に詩の揮毫を願ったのである。」と、以上のようないきさつが判明いたしました。この紙切れは、詩稿の裏に走り書きしただけの、普通なら見逃してしまいそうな書きさしにすぎないものでしたが、これが出現したため、屏風成立の由来が、はっきりわかりました。ここで、大阪北野の金氏の別業に諸家を招いたとあります。この金氏、これはカネ何々という苗字で、荒木李谿の家とは相当親しい間柄らしいのですが、この金氏というのが誰かわからない。当時大阪の惣年寄に、金谷与右衛門という人があります。天満の旧家で、金氏はこの金谷与右衛門ではないかという推測がまず立つわけなのですが、しかし金谷一族が、懐徳堂・混沌社の人たちと、交わりがあったという資料らしきものは残っていない。そうすると他にカネ何々という人を探さねばなりません。ここまでが本日の話の発端であります。これから、本題の尼崎屋が出てまいります。

この当時にできた「浪華郷友録」という書物がございます（本を示す）。大阪の文化人の名録で、何回も改定を加え、繰返し出版されました。ちょうどこの屏風ので

きた時代に近い、寛政二年版の「浪華郷友録」を繰って見ますと、中に「聞人」の項目がありまして、聞人というのは文化人、風流人という意味ですが、その中に、金崎元永という人が出てきます。「金崎元永、字は子貞、松宇と号す、梶木町、金崎七右衛門」と記載されています。梶木町は現在の北浜五丁目です。この金崎元永こと金崎七右衛門が、おそらく別業の主人金氏その人であるらしいと見当をつけました。それで、これを手がかりに、懐徳堂の古い記録をいろいろ見てみました。懐徳堂の創建された時の、第一回の授業を受けた人たちの名簿が残っています。「懐徳堂開講会徒連名」というのですが、その中に「尼崎屋七右衛門」というのがある。それから、お買米といいまして、幕府が大阪の町人から御用金を召し上げることが再々あって、享保、宝暦、文化の三度に及んでそれがおこなわれています。大阪の富裕な町人は、身分相応に、巨額の金を出しました。文化四年の御買米名録を見ますと、「梶木町、尼崎屋七右衛門」というのが出てくる。これらを合せて考えますと、どうやら、金崎氏の屋号は尼崎屋で、金崎七右衛門と尼崎屋七右衛門とは同一人物であると確定してよいらしい。そこで、懐徳堂の記録をさらに見てまいりますと、「懐徳堂定約附記」というものがございます。学校のできた時に、規則をいろいろ取り決めました。「懐徳堂定約」というて、その全文は「大阪市史」にも収めてあります。別に、明治四十四年、重建懐徳堂の発足を記念して、幸田成友先生が「懐徳堂旧記」を私費で印刷して配られた（本を示す）、その中にも収めてあります。定約は、享保の創建時に決めたものであるけれども、それから三十年後の宝暦時代に、附則をつけ加えました。その「懐徳堂定約附記」に、当時の懐徳堂関係者が揃って連署致しております。そこに尼崎屋七右衛門道可、尼崎屋市右衛門高直の名前が並んで出ている。尼崎屋七右衛門、尼崎屋市右衛門という人が、懐徳堂に相当ゆかり深い人であることが判明してきます。さらに「懐徳堂内事記」という記録がございます。懐徳堂の創立以来の、学校でおこったいろいろな出来事を書きとめた、学校日記のような内容のものであります。この「懐徳堂内事記」に、大へん重要な記事が出ています。懐徳堂は、そもそも享保九年に、道明寺屋吉右衛門の持ち地、尼崎町一丁目の間口六間、奥行二十間の土地を、道明寺屋が無償で提供して、そこに学校が建ちましたが、三年後の享保十一年に、その東隣りの間口五間、奥行二十間の土地、これが

尼崎屋市右衛門所有の土地ですが、それを付け加え、間口十一間の敷地になったとあります。だから、道明寺屋とともに、尼崎屋もまた懐徳堂の創建に大へん力を尽した家であることがわかります。その後、天明時代になって、学校維持にお金が必要になり、皆んなが醵金致します。もうこの時分には創立時代の後援者五同志の人たちが皆亡くなっておりますが、代って次の世代の人々が、天明元年、二年、三年とひき続いてお金を集めました。この時に、尼崎屋七右衛門、市右衛門の両名が、毎年、銀三百匁ずつを醵出しています。「懐徳堂考」の中に、醵金した人の名前及び金額が出ております。さらに、「懐徳堂内事記」を見ますと、三宅春楼先生に代って、天明二年に中井竹山先生が新学主となられましたときに、「なかんずく両尼崎屋は、諸事引き受けの世話を致され候」とあり、尼崎屋市右衛門、七右衛門の、両尼崎屋がいろいろ世話を引き受けたことが書いてある。こういうふうに尼崎屋は、懐徳堂に大へんな貢献を尽した家であることが、明らかになってまいります。

懐徳堂とゆかりの深い学者に、中村両峰という方がおられました。竹山先生の門下で、学問がよくできました。竹山先生は、両峰の才能を愛して、目をかけておられた。この中村両峰の妹さんが、中井履軒の奥さんです。本日配布して頂いた冊子の中の系図を見て頂いたらわかりますが、履軒先生の後配、中村有則妹と書いてあります。この中村有則が、すなわち中村両峰です。しかるに、不幸なことに、両峰は竹山先生に先立って亡くなり、墓碑銘を師の竹山が書かれました。それを見ますと、両峰兄妹は、幼少の時に両親を失って孤児になったのを、親戚の金崎修夫が引取って鞠育したとあります。親戚の金崎修夫というのは、尼崎屋市右衛門です。ですから、中村両峰の家と、中井家、尼崎屋の金崎家は、縁につながる親戚になる。懐徳堂を中心に、お互が固く結ばれた家であります。金崎家の子供が亡くなった時、やはり墓碑銘を竹山先生が書かれて、その文章は「尊陰集」に収めてありますが、そこで、竹山先生は「金崎の家と、中井の家は、通家である」といっておられます。通家とは、父祖の代から親しく交際してきた家という意味であります。よって、両家の親密の程がわかります。さらにいいますと、最初にふれた屏風の所有者荒木李谿は、これまた懐徳堂に有縁の道明寺屋吉右衛門の孫でありますから、そのつながりで、李谿が金崎氏の北野の別荘を借り得たのでありましょう。

「浪華郷友録」に名前の載っている金崎元永の尼崎屋七右衛門という人は、なかなか文雅趣味の方でして、大阪大学の懐徳堂文庫に残っている「大日本史」の写本、これは懐徳堂の関係者が先生も生徒も皆んなが寄って写した本ですが、ここの個所は誰某が写した、ここの個所は何某が写したと、担当者の署名がしてあります。その中に金崎元永の、尼崎屋七右衛門の名前も出てきます。それから、竹山先生の詩文集「奠陰集」に、尼崎屋七右衛門との唱酬詩が収めてあります。また、山片蟠桃の詩集「草稿抄」を見ますと、蟠桃と尼崎屋七右衛門がやはり詩の応酬をしているというふうに、大へん文雅に明るい人である。この人の奥さんもまた文雅婦人でして、蘭窓と号しました。吉野に花見に行った時の「芳野日記」という自筆の紀行が、大阪府立中之島図書館に残っております。しかし、享和元年（一八〇一）に尼崎屋七右衛門が亡くなり（池田の林田氏所蔵の荒木李谿詩稿により判明します）、その後、尼崎屋の家はだんだん傾いてきたらしい。天保時代に御用金の拠出が行われますが、文化の御用金名録に載っていた尼崎屋の名前も、天保の御用金名録から姿を消してしまいます。同じ天保時代に、懐徳堂修覆の募金がありましたが、この醵金名簿にも尼崎屋の名前を見付けることができません。

池田福原家の屏風を見せて頂いたことが機縁で、その成立事情を探るうちに、懐徳堂とは特別の関係ある、大阪尼崎屋の一族を知るに至りました。尼崎屋は、懐徳堂創立の以前から、大阪を代表する名家であり、資産のある家でした。北浜で醤油醸造を業とし、懐徳堂の創建に大へん力を尽くされ、土地を提供して、以後も学校の維持に、百年以上にわたって尽くされました。西村天囚先生の「懐徳堂考」に、五同志の功績は書いて下さいましたので、五同志の名前は、懐徳堂を語る時に必ず上るのですが、同じく懐徳堂のために尽くした尼崎屋一族の功績は、残念ながら埋もれてしまっております。本日、このゆかりの席上で、懐徳堂のために尽くされた尼崎屋一族のことをお聞き取り頂いて、供養にさせていただきたいと存じました。これで私の話を終わりにさせて頂きます。

（関西大学教授）

（この稿は昭和六十年三月二十四日第二回懐徳忌における講演筆記に筆者の校閲を得たものです。）